

## 川崎ジュニア文化大賞受賞作品

### 「未来の友達ロボットを作りたい」

高津小学校 6年 平原 慈慧

ぼくの家にはテレビがない。「受け身でテレビを見る生活が続けると、自分の頭でモノを考える力が育たなくなる。」というお父さんの考えからだ。時々、学校でテレビの話題になるとついていけないことがある。テレビがないのはいやなので、去年の冬、サンタさんをお願いしたけれど、もらえなかった。お父さんは、「自分の頭で考える人間にならないと、AI時代になったらロボットに使われるぞ。」という。ぼくが大人になったら、ぼくはロボットに命令されて、働くようになるのだろうか。

ぼくの将来の夢は、ロボットを作る研究者になることだ。ドラえもんみたいに一緒に遊べて、一緒に暮らせる友達ロボットを作りたい。友達ロボットがいれば、兄弟がいない子でもさみしくない。ぼくには弟がいるけれど、トランプをやる時などは三人の方が楽しいに決まっている。

分からない宿題があったら教えてくれるグーグル先生のような機能を付けたり、わすれ物をした時には学校に届けてくれるドローンも付ける。ぼくの顔色を見て、「ストレスがたまっています。」と言ってくれるお医者さん機能や、原子力で動く鉄腕アトムのような腕力も身に付けさせる。人間にはない機能を付ける事で、人間と友達ロボットは助け合う事が出来るようになる。

現実社会では、人型ロボット「ペッパーくん」が開発されている。ペッパーくんとは何度か遊んだ事があるが、動きはぎこちないし、言葉も片言でパターンが決まっているからつまらない。それに、顔が真っ白で表情がないから、感情がないように見える。感情がないとケンカも出来ないから、友情が深まらない。

ぼくの作る友達ロボットには、「優しさ」という感情がある。学校でいやな事があった時、相談相手になってくれたり、お母さんにおこられた時にはユーモアを言って笑わせてくれる。ぼくの気持ちを思いやって、なぐさめてくれる優しいロボットを作りたい。

もう一つ大切な事がある。それは「成長」だ。ぼくが成長するのと同じように、友達ロボットも成長しないといけない。ぼくが中学生になるのに、ロボットだけが小学生のままだと、話がかみ合わなくなるし、お互いに高め合うということが出来なくなる。

ぼくは、最初からかんぺきなロボットよりは、一緒に暮らしながら、学び合って、ぼくと気が合うように、育てていく方が良いと思う。

川崎市にはキングスカイフロントという最先端の研究開発拠点があり、様々な研究が行われている。「ロボットスーツ」を着たら、車いすの人が歩けるようになる研究も行われているそうだ。いつかこういう所でロボット開発が出来たら良いなと思う。

ぼくが大人になるころには、今ある仕事のうち、約半分はロボットがやるようになる。そうしたらぼく達人間のやる仕事は半分になる。空いた時間で何をしよう。

ぼくは、友達ロボットと一緒にぼうけんがしたい。人間では行けないような所にロボットが行き、動画をとる。たとえば、海底の旅。水圧や地形などはぼくが調べて、そうじゅうする。毎日、海にもぐっていたら、しずんだ宝船を見つけることが出来るかもしれない。

ぼくは友達ロボットの登場で、今までに無かったような新しい体験がたくさん出来るようになると思う。ロボットに使われるような時代にはならないと思う。

お父さんには内緒だけれど、ぼくのロボットにはテレビを内蔵させる。たまにはテレビも見ないと、友達ロボットと話が合わなくなるからね。